

そういうじの力で

そうじの力社長／
組織変革プロデューサー

運命を開く

そうじを通じて企業組織を強くする。この信念のもと、累計五百社を超える企業を支援してきた小早様一郎氏。かつて職場に馴染めず、道を見出しかねていた小早氏を変えたそうじ。そして支援先に次々と変革をもたらしてきたそうじの力についてお話しitただいた。

本質を明らかにし
究める

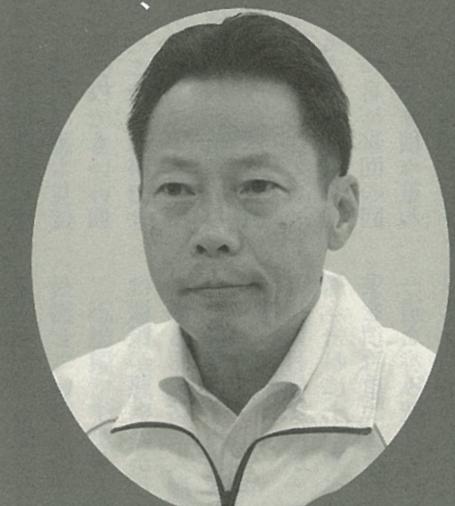
「君は理念がないからズレるんだ」
尊敬する師匠からそう指摘されたのは、いまから約二十年前。脱サラしたものの、本当に進むべき道を見出しかね、自分の浅はかさに舌を噛んでいた折のことでした。

の師匠の教えでした。では、私の人生の究極目的は何だろう？ この一度きりの人生を、私は何のために生きるべきか？ 勉強を重ね、自問自答を繰り返す中で見出したのが、「和の社会をつくる」という理念でした。エゴを剥き出しにして競争を繰り返すいまの社会に一石を投じ、日本人が本来持つ和の心に基づいて、お互いに助け合い、心豊かに暮らしていく社会の実現に貢献していくのです。

この理念の下に私がいま行つているのが、そうじを通じて企業組織を強くするお手伝いです。具体的には、委託先の企業様を定期的に訪問し、現場巡回指導、レクチャー、実習、ミーティングなどを通じ、職場に整理・整頓・清掃が定着するよう、意識面と仕組み・技術面の両面から助言を行い、組織改革に繋がる「気づき」や「実感」の機会を提供しています。汚れたトイレを見た時には、そ

りついた汚れを磨き落としてお見せすることもあります。初めて見て見るのはビックリされますが、「確かにうちの会社は汚れている」「このままではいけない」と実感され、自らも実践することでこの活動の意義を理解されるのです。

二〇〇七年頃から活動を始め、これまでに支援した企業様の数は累計五百社超。売り上げや利益が拡大した、不良品が減った、社員の定着率がアップした、不良在庫がなくなった等々、たくさんのお喜



これはや・しょういちろう——昭和43年兵庫県生まれ、早稲田大学卒業後、日産自動車㈱に入社。制度改革のプロジェクトリーダー等を歴任。平成21年㈱そうじの力を設立。累計500社以上の支援先で組織変革に貢献。全国で現場指導や研修、講演活動を展開。著書に『「そうじ」をすると、なぜ会社がよくなるのか』(セルバ出版)、『8割を捨てて2割に集中する検てる経営』(スタンダーズ)がある。

「転原自在」

いたり、拭いたりして、場を綺麗にすることだけに止まらず、その奥にある本当の問題を導き出すことを目指しているからです。本質を明らかにし、究めるお手伝いをすることこそが、私の支援活動の真の目的なのです。

「転原自在」
依存人格から自立人格へ

独立する前の私は、不満だらけのサラリーマンでした。大学を出て有名企業への就職を果たし、希望に胸を膨らませて職場に赴いたものの、そこに待っていたのは理不尽なことばかりの現実でした。

配属先の人事部門で職場の改善提案を求められた時のことです。私は入念に準備を重ね、五十ページに及ぶ提案書にまとめ上げて得意顔で提出しました。ところが報告の場では、「これは提案じゃない全部おまえの不平不満だ！」と、集まつた上司や先輩から総スカンを食らい、却下されてしまったの

いま振り返れば、例えばヘビースモーカーであつた上司、先輩の気持ちも一顧だにせずオフィスの禁煙を主張するなど、独りよがりです。



支援先の巡回指導で、問題点を随時指導する

特集 積善の家に余慶あり

ような状態で、社員様に規律正しい行動を求めても無理な話です。しかし、そうじを実践して身の回りの環境に物理的に働きかけると、人の意識が変わります。必要最小限のものが、使いやすい場所に置かれ、どこに何があるのか一目瞭然。塵一つない状態になれば、社員の間に「約束を守ろう」「人が見ていなくても手を抜かないようにしてよう」「ものを大事に使おう」「お互いに気を遣おう」という意識が醸成されていきます。そして、こうしたよい環境を他の誰かにしてもらうのではなく、自ら行動してつくっていくことが、意識の改革に繋がっていくのです。

致知

| 2023-2

しかし冒頭に述べた通り、確たるビジョンも持たずに会社を飛び出したため、たちまち道に窮してしまいました。そんな折にご縁をいただき、理念を持つことの大切さを教えてくださった師匠が、「天命舎」という私塾を主宰する黒田

な正義感に基づく正論の羅列ともいえ、皆さんから共感を得にくいためであつたことは理解できます。しかし当時の私には、せっかく作成した報告書が却下されたことへの不満ばかりが募る結果でした。そうした体験を重ねるうちに、私は一所懸命やつたことが上司の好みや機嫌一つで否定されたり、突然はしごを外されてしまう現実ばかりを過度に意識するようになりました。納得のいかないことがあればすぐに先輩や上司に喰つてかかり、口を開けば「会社が悪い」「上司がアホだ」と他者批判を繰り返す。自分は保守的な風土に立ち向かう改革者のつもりでいましたが、周囲からは「火を噴くゴジラ」と揶揄され、白い目で見られていました。いくらあがいても変えられない現実に自分の限界を感じ、結局三十五歳で会社を辞めたのです。



「そうじは確実に他人様のためになり、実践すれば必ず
お天道様が何かしらの形でお返しをしてくださいます」

悦司先生でした。

黒田先生からは、先生の師匠である思想家・大和信春先生が提唱された「転原自在」という言葉を教わりました。転原自在とは、物事を転ずるもとは自分にある。自分が動けば物事は変わるということです。

サラリーマン時代の私は、目の前の問題を他人のせいにするばかりで、自ら動いて改善していく意識に欠けていました。別の言い方をすれば、会社や仲間を批判しつつもそこに寄りかかっている依存人格の持ち主でした。そんな私に黒田先生は、自ら動いて状況を変えていく自立人格の持ち主になるよう説いてくださいました。

自分の至らなさを深く反省した私は、黒田先生の下で勉強を重ね自らも経営者やビジネスマンの方々を対象とする勉強会を主宰するようになりました。その中で、冒頭述べた「和の社会をつくる」という理念に辿り着いたのです。

そうじを通じて
ここにこサイクルを回す

こうした様な体験を経て実感するのは、伸びる会社には、先入観に囚われることなく、まずやつてみようという、素直で積極的

会社でそうじを実践することの
メリットに、社長も新入社員も一
緒に参加できることが挙げられま
す。普段直接触れ合う機会の少な
いトップと一般社員が一緒に体を
動かし、汗を流せば、そこに会話
が生まれ、時に笑いも起ります。
実践を続けるうちにお互いの理解
や信頼関係が高まり、風通しのよ
い社風が出来上がっていくのです。
そういうのもう一つのよい点は、
特別な能力やスキルがなくても実
践できることです。私は企業様の
支援に入ると、そうじを実践する

こうした利点を突き詰めていけば、そうじは組織を挙げて人間力を養う取り組みともいえます。会社の成長に寄与する優れた商品やサービスは、社員一人ひとりの人間力を高めることによって生まれるのです。

もう十年以上前になるでしようか、私が講演でそうじのお話をした際に、受講いただいた方から「小早さんのおっしゃっていることは『積善の家に余慶あり』ということですね」と言われたことがありました。

お天道様は
見て いる

際のチームを結成し、チームごとにリーダーを選出していただきますが、リーダーは役職や年齢に関係なく、輪番で務めていただこうとしています。

リーダーは、チームを率いて活動を推進することで、自発性や創意工夫が養われます。また、自分が行動を起こすことでメンバーが動き、職場環境がよくなっていく手応えを得られます。それはまさしく転原自在を体感することであります。リーダーを務めることで自信を得た社員様は、次々と立派な幹部に育っていかれるのです。

りません。まだ何かが足りない。もやもやした状態を開拓する転機となつたのが、勉強会を受講してくださつていた経営者の方からいだいたひと言でした。

「小早さん、 そうじをするといいですよ」

なぜそうじなのか、最初はよく理解できませんでした。それでも妙に心に刺さるものがあり、早速翌日から早起きをして自宅のトイレそうじや、近所のゴミ拾いを始めてみました。

実践を続けるうちにふと思いました。道端にゴミが落ちているのを見た時、以前の自分なら、「誰がこのゴミを落としたんだ」と腹を立てるだけで、きっと何も行動を起こさなかつただろう。しかしそうじの実践を始めてからは、誰が悪いかはともかく、まず目の前に落ちているゴミを捨うようになつた。自ら動いて物事を変える。これこそ転原自在の実践であることに思い至つたのです。

黒田先生の下でもう一つ学んだのが、やはり大和先生が提唱された「にこにこサイクル」でした。

そうじになぞらえてこれを説明すれば、足下のゴミを捨てば、周

伸びる会社の
共通点

りの人々に喜ばれ、大事にされるようになる。すると今度は自分が助かり、喜びを得て、さらに周りの人々の役に立つ行動をしようと、いうよい循環が生まれます。

そうじを実践する人が増えていくれば、ここにこそサイクルが世の中でどんどん回っていく、それが自分の理念である「和の社会」の実現にも結びついていく。そう思い至った私は、株そじの力を設立し、そうじを通じた組織改革の推進事業を立ち上げることにしたのです。二〇〇九年、四十一歳の時でした。

『致知』でお馴染みの鍵山秀三郎先生の掃除道を学ぶため、日本を美しくする会の活動にも参加しました。素手で便器を磨かれる鍵山先生の姿には衝撃を受け、そうじの概念を覆される思いでした。「小早さん、頑張ってください」と先生が私の背中を押してくださいり、会社の相談役に名を連ねてくださったことは、どれほど励みになつたことでしょう。

しかし当初は、支援が思うようにいかない企業様もたくさんありました。面会の約束をすっぽかされたり、直前でキャンセルを喰らわされることもしばしばでした。

また、そうじはトップが率先して実践し、まず自らの意識を変えしていくことが重要です。しかし、そうじは下々がやるものであり、社長がやる仕事ではないという意識から脱することができます、結局活動をやめていかれる企業様もありました。

支援を依頼されたある石材会社様では、使うあてもなく十年以上も放置されていた大量の石材を処分することに、社長様がなかなか踏み切れずにいました。それでも職場でそうじの実践を続けていた

知りませんでしたが、その意味するところを理解し、これはまさしく自分の活動を支える転原自在の精神や、にこにこサイクルを表す言葉に他ならないと実感しました。そして「積善の家に余慶あり」という言葉はまた、「お天道様は見ている」という私の好きな言葉にも通じています。そうじはささやかな行為ですが、確実に他人様のためになり、実践すれば必ずお天道様が何らかの形でお返しをしてくださることを、日々の活動を通じて実感しています。ただ私にとっては、そうじの功德が自分に返ってくるか否かは問題ではありません。たとえ自分に返ってこなくせん。たとえ自分の子や孫、あるいは世の中に必ずよいことがもたらされると信じているからです。

31